

令和3年度東大阪市地域研究活動報告書

研究テーマ

留学生と小中学生の多言語・多文化交流

近畿大学
グローバルエデュケーションセンター
高橋朋子

2022年3月提出

1 はじめに ―グローバル社会って？

グローバル社会ということばをよく耳にしますが、それは、いったいどのような社会なのでしょう。みなが英語を話せる社会？外国人が多く住んでいる社会？若者がみな留学している社会？ 私たちは、その意味すらもよくわからないまま、グローバル社会ということばを使っています。この報告書を読んでいる方は、日本はグローバル社会だと思っていますか。また、東大阪市はどうでしょう。

それを考えるにあたって、人の移動に焦点をあてます。人の移動からグローバル社会を捉えてみましょう。近年、国内だけでなく国外へ移動する人が増えてきました。一度移動した後にまた移動を繰り返す人も多いです。日本には海外から移動してきた人がどのぐらいいるのでしょうか。1990年代以降、中国帰国者やインドシナ難民、デカセギと呼ばれる日系人、国際結婚や留学生、技能実習生、労働者、高度人材などの人々が来日しています。旧植民地出身の定住外国人をオールドカマーと呼ぶ（中島 2008）のに対し、これらの人々は、ニューカマーと呼ばれています。彼らのビザの種類や国籍、なぜ来日したのか、どのように来日したのかなどの来日理由やその経緯は様々です。また、彼らの滞日期間は長期化、定住化の傾向にあると言われています。

国際連合センターの定義によれば、移住の理由や法的地位に関係なく、定住国を変更した人々を国際移民とよぶと書かれています。日本政府は、移民を受け入れていないことになっており、政策のなかには「移民」という用語を使用していません。しかし、上記の定義に従えば、日本はすでに多くの移民を受け入れていることとなります。2021年の外国人登録者数は288万人（出入国在留管理庁2021）、全人口に占める割合は2.5%であり、すでに世界第4位の移民受け入れ大国となっています。また、東大阪市に目を向けると、2022年2月時点における外国人登録者数は18,410人、市全体の人口に占める割合は約4%であり（東大阪市HP）、外国人住民との共生が重要な課題であることがわかります。

一方、このような「移民的背景をもつ」（是川2021）人々と、私たちはうまく共生できているのでしょうか。学校や職場、地域社会においてコミュニケーションは円滑に進んでいるのでしょうか。メディア報道や多くの先行研究では、学校における「いじめ」や「差別」、職場での「虐待」や「搾取」、地域社会における「排除」や「ヘイトクライム」などの問題が指摘され続けています。そこには、エスノセントリズム（自民族・自己文化中心主義といって、自国の文化を中心におく考え方）や文化の本質主義（日本はこういうものだ、アメリカはこういうものだと決めつける傾向にある考え方）があり、長くほぼ単一言語社会、同質社会だった日本において、多言語・多文化共生の実現を阻害する要因となっています。多言語・多文化共生は、制度や法律を制定したからといって容易に実現できるものではなく、社会の成員ひとりひとりが「多様性を受け入れ、相互に尊重し合う中で、ともによい街を作ろう」という意識の醸成が肝要です。そのためには、幼少期からの教育が重要であることはいうまでもありません。多様な人々と出会い、その違いを超えて交流

し、学び合うことのおもしろさや楽しさ、難しさを知ることが大切です。そして、それは彼らの将来において大きな意味を持つでしょう。別の言い方をすれば「グローバル＝英語が得意で留学した人」というステレオタイプを見直すことであり、異言語、異文化、異なる背景を持つ人々に歩み寄ろうとする姿勢を培うことといえます。これは、今後の世界を生きる子どもたち全てに必要な力といっても過言ではありません。と同時に、そのような力をもつ人々は東大阪市の財産となりうる可能性をもっているといえます。

そこで、私たちはグローバル社会を「多様な言語や文化が混在している社会」だと考え、そのような場を小学生に体験してもらおうと考えました。それが、本研究「留学生と小中学生の多言語多文化交流」です。多様な背景をもつ大学生、留学生と東大阪市内の小中学生との交流プログラムを通して、小学生や留学生・大学生は何を考え、何を学んだのかを丁寧に考察します。考察結果から、多文化共生社会に生きる私たちに必要なものは何か、を共に考えたいと思います。

2 研究活動の目的

本研究活動の目的は、次の2点です。

1. 東大阪に関わる多様な人々の間で、多言語・多文化交流を活発に行う
2. 活動を通して、参加者が「多文化共生社会のメンバーである」という意識を涵養する

ここでいう多様な人々とは、東大阪市内の小中学生と大学の留学生・大学生をさしています。小学生には、日本人児童や国際結婚家庭の児童、外国にルーツをもつ（以下：外国ルーツ）児童がいる一方、今回の交流で「初めて外国人と話した」というように異文化との接触があまりない児童もいます。「昔、家族で行ったハワイでは～」というように家族での海外体験を語る子どももいます。一口に小学生と言っても実に様々な子どもがいて、多様になってきていることがわかります。また留学生・大学生もその国籍や家庭背景、言語背景、大学入学経緯や目的などが様々です。特に近年、日本生まれあるいは幼少期に来日し、日本の教育を受けた外国ルーツの大学生が増加しています。今回、この活動に協力した3つの大学にも外国ルーツの大学生が在籍しています。1の「はじめに」で述べたニューカマーの第二世代です。こうしてみると、この交流活動は、多様な児童と多様な大学生の交流といえるでしょう。

さて、活動を通して、何が可能になるのでしょうか。児童は、大学生・留学生との交流を通して、これまでに見たり聞いたりしたことがない多言語・多文化に接触することができます。また、留学生の留学経験や海外での生活体験、ライフストーリー（どのような人生を歩いてきたか）を聞くことによって、ロールモデル（素晴らしき先輩）の存在を知り、刺激を受けるでしょう。外国ルーツの児童は、同じ境遇の大学生がどのように日本社会を生きてきたのかを知ることにより、自尊心の高まりやルーツへの誇りを感じる機会となるでしょう。それが、キャリア形成につながる可能性もあります。一方、留学生は、大学という小さな空間を

出て、生きた日本語との接触や交流が可能になるうに、自国と異なる学校文化の体験ができます。さらに、母語や母文化を伝える活動を通して、自分の国を客観的に見る視点を得られます。また、改めて自分のルーツに責任と誇りを持つのではないのでしょうか。外国ルーツの大学生にとっては、自分のアイデンティティ（私はなにものなのか）を考え直す機会となるし、自分の経験を語る場にもなります。双方の活動目的は、一見異なっているように見えますが、この協働活動の先には、多様な人々が共生する社会に、自分がどのように参画し、貢献できるのか、どのような社会を目指すべきなのかを考える土台づくりという共通した目標があると考えられます。

3. 研究活動の実践

まず、実践内容について紹介します。表1を見るとわかるように、実践は、大きく2つに分かれています。1つめは、3つの小学校でそれぞれグループ交流（大学生・留学生1名と小学生3～4名のグループを作り、交流をする）をする、2つめの多文化交流フェスティバルは、3つの小学校が合同でその成果を発表し合うというものです。

表1 活動実践の概要

	年月	プログラム	実施場所	参加者	
				児童	大学生
1	2021年11月	グループ交流	上小坂小学校	66名	12名
	2021年11月	グループ交流	弥刀小学校	69名	17名
	2021年12月	グループ交流	弥刀東小学校	60名	18名
2	2022年2月	全体交流	近畿大学→創成館	実施せず	
	2022年2月	各学校内交流	各学校	0名	

成果には、劇やポスター、プレゼンテーションなどがあります。1つめの各小学校での交流は順調に開催されましたが、2つめの全体交流は、オミクロン株の感染拡大により、小学校で休校や濃厚接触者の教員や児童の欠勤、欠席が相次いだこと、大学の感染対応レベルのステージが上がり、学生の集団活動への参加が制限されたことなどから、中止せざるを得ませんでした。そこで、代替案として、各学校で実情に合わせて、その成果を発表するということになりました。残念ながら大学生・留学生はそこに参加していません。

本年度の活動は、コロナ禍の真っ最中でしたが、参加した学生はのべ47名にのぼりました。また、図2にあるように、夜間中学の学生の参加もあり、多様な外国人を抱える東大阪の現状を映し出す存在となりました（文科省の資料（2021）によると、令和2年4月時点における公立夜間中学の数は全国に34校、そのうちの11校が大阪府と大阪市にあります）。

次に、参加した大学生・留学生について説明します。図1に示したように、彼らの国籍やルーツをもつ国は非常に多様です。最も多いのは韓国で、留学生が4名、韓国ルーツの学生が5名、続く中国は、留学生6名、中国ルーツが1名、台湾は留学生3名の参加です。この後に続く国は、すべて1名ずつですが、ブラジル、アメリカ、フランス、メキシ

コはそれぞれの国のルーツを持つ学生、マレーシア、ベトナム、タイ、バングラデシュは留学生で、ネパールは労働ビザをもつ親に帯同して来日した家族ビザの生徒です。

図1 学生が紹介した国

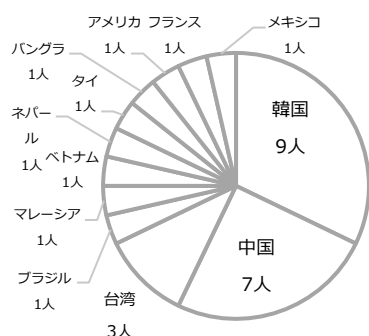


図2 学生の所属

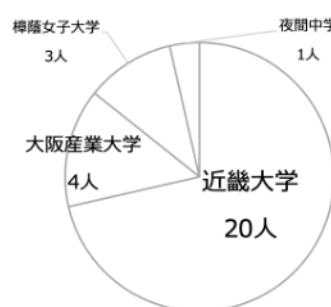


図2をみるとわかるように、学生の所属も様々で、最も多いのが近畿大学、続いて大阪産業大学、大阪樟蔭女子大学と続き、夜間中学生が1名となっています。

3. 1 小学校でのグループ交流

次に、グループ交流を見ていきましょう。

2021年11月、12月にかけて3校（上小阪小学校、弥刀小学校、弥刀東小学校）の小学5年生と留学生・大学生がグループ交流を行いました。これは、各小学校が設定した時間に、大学生・留学生が学校を訪問し、体育館で小グループに分かれて交流するというものです。1時間（45分）の活動は、おおよそ以下のように進められました。

表2 プログラムの進行

形態	活動内容	特記事項
全体	はじめのあいさつ	
グループ	交流活動	留学生1名+児童3~4名
	留学生が文化を紹介	留学生がグループを移動×
	質疑応答など	4~5回くりかえす
グループ	交流活動	
	児童が日本の文化を紹介	上小坂のみ
全体	おわりのあいさつ	
	児童から留学生へ歌のプレゼント	弥刀のみ

参加にあたり、留学生は自分の出身国やルーツ国の情報について、プレゼンテーションGできるようパワーポイントのスライドや写真を準備しました。内容は、「自分の国について伝えたいこと」としましたが、食べ物や祭り、地形やあいさつなどその内容は多岐にわたっていました。小学生が興味関心を持ってくれるように、とクイズを入れたり、写

真を多く使用したりするなど、工夫を凝らしていました。大学生・留学生が作成したパワーポイントのスライドを一部載せておきます。

写真1 ベトナム人留学生のプレゼンテーション資料の一部



写真2 ブラジルにルーツを持つ大学生のプレゼンテーション資料の一部



以下、活動の写真です。特に記載のないものは報告者が撮影しました。

写真3 活動の様子（上小坂小学校）

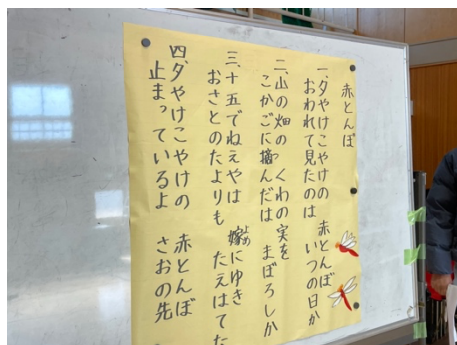


ブラジルルーツの学生と児童

ネパールの夜間中学生と児童

上小坂小学校では、写真からもわかるように、三密（密接、密閉、密集）を避けるために、体育館を使用し、グループごとの距離を十分にとって行われました。教員はグループ間を巡視したり、時間を計って次のグループへの移動を促したりするなど補助的な役割を担い、児童が主体的に活動しやすい環境づくりがなされていました。

写真4 活動の様子（弥刀小学校）



児童から歌のプレゼント



ベトナムからの留学生と児童

弥刀小学校でも上小阪小学校と同様のグループ活動を行いました。最後のあいさつが終了したのち、「赤とんぼ」の歌が児童からプレゼントされました。先生のピアノに合わせて一生懸命歌う子どもたちのすがたを見て、留学生は驚いたようです。留学生は、日常生活で、J-POP やアニメソングを聴く機会が多いですが、日本の童謡を耳にすることはほとんどありません。活動後、「美しい」、「日本の歌はすばらしい」、「涙が出そうになった」、「子どもたちの歌はうますぎる」などというたくさんコメントが寄せられました。

写真5 活動の様子（弥刀東小学校）



韓国ルーツの大学生と児童



マレーシアの留学生と児童

弥刀東小学校でも同様にグループに分かれて活動を行いました。この小学校では、「留学生だけでなく、外国にルーツをもつ大学生にも来てほしい」という要望がありましたので、多くの外国ルーツの学生が参加しました。先輩たちの姿を見て、エンパワー（大学生になる自分の姿を重ね合わせ、勉強を頑張ろうと思う機会になる）されました。おわりのあいさつの際に大学生がコメントを述べる機会がありました。一人の学生が「差別は絶対によくない」というメッセージを送ったところ、それに応じて児童からもコメントが返ってきました。数分という短い時間でしたが、応答した児童への拍手が起こり、学びを深めるよい機会となっ

たと思います。

3. 2 多文化交流プログラム

2022年2月に実施される予定だった全体の多文化交流プログラムは、各小学校内での実践となりました。上小阪小学校は、全体の多文化交流プログラムに近い「ブース形式」によるグループごとの発表をし、ふり返しシートを書きました。グループ交流には、クイズや人形劇、プレゼンテーションなど多様な形式が採用されていました。弥刀小学校は、行きたい国について調べ、資料を作成しました。弥刀東小学校は、興味のある国について調べ、ポスター作成をし、異学年への発表を行いました。いずれの小学校も休校や学級閉鎖、児童や教員の欠席など予期しない状況の中で、このような実践は困難が多かったと推察します。しかし、次に紹介するように、子どもたちの作品には多言語・多文化への思いがあふれています。

① 上小阪小学校

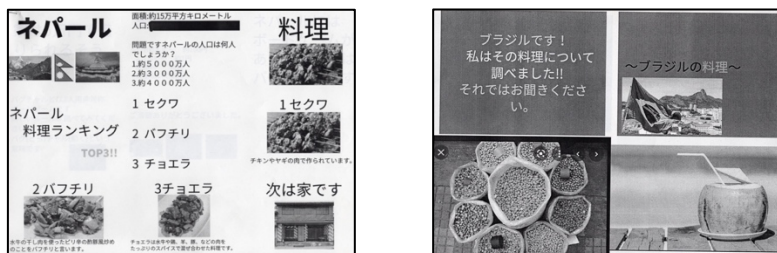
写真6 グループ発表のようす（写真提供：上小阪小学校）



各グループで調べたことを発表しています。

② 弥刀小学校

写真7 児童が作成したプレゼンテーション資料（提供：弥刀小学校）



いずれも行きたい国について調べたものです。ほかにも台湾、ニュージーランド、韓国、アメリカなど多くの国について興味関心を持ったことがわかりました。

③ 弥刀東小学校

写真8 児童が作製したポスター（資料提供：弥刀東小学校）



ほかにも、イギリス、カナダ、ロシアやブラジルなど多くの国の資料がありました。また映像も作製し、3年生への発表も行いました。

4 研究結果

3で述べた2つの活動を通して、大学生・留学生、子どもたちは何を考え、何を学んだのでしょうか。3で述べたグループ交流活動の終了後に、回収した振り返りシートをデータにしてその学びを考察しました。

表3 データ収集について

大学生・留学生		児童
Google Forms	収集方法	ふり返しシート
活動から1週間以内	収集時期	事後学習
web上	収集場所	教室

大学生・留学生に対する質問内容は、表4の通りです。

表4 大学生・留学生への質問項目

質問項目
1 参加した感想を書いてください。よかったこと、よくなかったことなど、なんでもどうぞ。
2 日本の小学校に入ってみてどうでしたか。不思議なこと、興味を持ったこと、自分の国の小学校と比べて違ったことなど、あればお聞かせください。
3 このような交流をもっと充実したプログラムにするために、何か提案や意見があれば教えてください。（例：もっと人数をふやした方がよい）
4 このようなプログラムがあれば、また参加したいですか。
5 4のように答えた理由を教えてください。

4.1 大学生・留学生の学び

大学生・留学生の学びをまとめると、以下の4つがありました。

- ① 日本の子どもたちとの接触
- ② 日本の学校教育
- ③ グローバル教育の重要性
- ④ 自国の文化の再認識

順に見ていきましょう。なお、文中の大学生・留学生のコメントは原文のまま掲載しています。①の日本の子どもたちとの接触です。日本の学校教育を受けて育った外国ルーツの学生以外、つまり留学生および夜間中学生は、日本の学校に足を踏み入れたり、小学生と交流したりする機会はほとんどありません。そのため、今回の交流では驚きの連続だったという声が多く聞かれました。特に、子どもたちのマナーのよさに言及する学生は多く、「とにかくかわいかった」、「子どもたちは本当に礼儀正しかった」、「交流のとき、困っている子どもをみんなで助けていた」、「元気がよくて一生懸命話を聞いてくれた」、「正座で聞いていた」、「静かに並んでいた」と述べていました。ベトナムの学生は、子どもが自由に見えたといい、「ベトナムではみな同じ制服を来て、ちょっと騒いだけで先生に厳しく叱られる。日本の子どもたちはのびのびしていると感じた」という感想を述べていました。さらに、「なぜ真冬に半袖と短パン？すごいな」という驚きの声もありました。中国や韓国では「冷えは大敵、足を冷やすのは体に悪い」と言われて育つらしく、これは、私たち日本人には、気がつかない驚きかもしれません。また、韓国のエンターテインメントは世界で人気がありますが、小学生も然り、『イカゲーム』¹を観ている子どもがいたそうです。「イカゲームを見ている子どもがいて衝撃だった。あれは19歳以下は見られないはず、日本の親は甘い」と厳しい意見も聞かれました。

②日本の学校教育についても多くのコメントがありました。もっとも驚いたのは、「子どもたち同士でサポートし合う」ことだそうです。日本の学校教育が勉強だけでなく、「人間を育てている場所」として機能していることを高く評価していました。いわゆる教科学習にとどまらない人間形成の役割を担っていると感じたといいます。ベトナムの学生は「たいていの子どもは自分のことしか考えないのに、仲間が困っていたらすぐに助け合いに行く姿勢がととてもいい」と述べています。「自分の国では、自分がよければいいという考え方が強く、こども同士が助け合う姿を見て驚いた」という韓国人学生のコメントもありました。また、弥刀東小学校の交流日、関西地方では震度3程度の地震がありました。直ちに校内アナウンスが流れ、児童の誰ひとり騒ぐことなく、椅子の下に隠れた一連の行動を見て、多くの学生が「あれはすごいって思いました」、「子どもなのに、さっさと行動していて慣れていた」などと語っています。一人の女兒が椅子の下で静かに泣いているのを見た学生が「本当は大声で泣きたいと思いましたが、日本の教育の素晴らしいところを見ました」と言い、避難訓練のような活動を学校で行うことの意義を再確認したといえます。

これは、日本の教育の特徴ともいえますが、TOKKATSU・特活（清掃や給食など教科学習以外の活動）が子どもたちの人格を形成するのに重要な役割を担うとして、広く東南アジアに

¹ Netflix 配信。勝てば天国、負ければ…即死。賞金に目がくらみ、奇妙なゲームへの招待を受けた参加者たちを待っていたのは、昔ながらの遊びを取り入れた死のゲームであった（Netflix HP より抜粋）というストーリーが繰り広げられる韓国のドラマ。R15 となっており、15 歳未満は視聴禁止となっている。

教育輸出されていることからその重要性が再認識できます。日本の学校教育の中にあると、当たり前すぎて気づかない多くの活動の重要性が留学生の目によって浮き彫りにされたと言えるでしょう。

一方、②日本の学校教育の中には、校舎は古いが、とても綺麗に掃除されていたというものが一方で、施設に対する疑問がいくつかありました。1つは、トイレについてです。

「男子トイレが外から丸見えで、子どもでも羞恥心があるはず。女子トイレが丸見えなら問題になるだろう。男女平等を重視している社会でおかしい」、「ニュースで小学生を性的な対象にした犯罪が多い（中略）。小学生男子を狙った盗撮犯罪が起こる可能性が高い」といったジェンダーや犯罪などの問題に触れたものもありました。2つ目は、校舎に特徴がない、というものです。「3つの学校に行ったが、同じ作り、同じ色、同じ体育館で全く違いがなかった。中国は学校によって違う。もっと学校の特色を出すような建物がいい」という意見に代表されるような自国と異なる日本の学校設備に関するコメントがありました。

バングラデシュ、マレーシア、ベトナム、中国の学生からの共通の語りとして、③グローバル教育の重要性があります。彼らの国では、このような交流活動はほとんどないそうです。

「日本の子どもがうらやましい」、「子どもたちにとって外国人と実際に交流することは財産だ」、「こんなイベントは教育によい」という交流活動を評価したものや「(私の) 国の学校はすべて本を使って勉強したが、日本の授業は実践的だ」というように教育方法に言及したものもありました。まだまだ、「国際教育＝英語」という枠組みが強い日本社会ですが、東大阪の取り組みのように少しずつ、多様な人々と増える機会が増えれば、まさしくグローバル教育の実践と言えると思います。

⑤自国の文化の再認識につながるコメントとして、多くの留学生が「今回紹介するため自分の国の文化についていろいろ考えた。日本と異なるいいところがたくさんあると改めて気づいた」というものや「冬の花火大会を紹介したとき、子どもたちがうわーと食いついてくれて、これは中国独特のものなんだと再認識した」などというコメントがありました。

最後に、上記の4つには入らなかった貴重なコメントを紹介します。それは留学生自身の成長です。ある学生の意見です。「これまで子どもたちと触れ合う機会はほとんどなかったが、今回多くの子どもたちと触れ合っただけで非常に大切な時間だった。これまで子どもの虐待や性犯罪、殺人事件などに特に思うことがなかったですが、これをきっかけに子どもを対象にした犯罪は質が悪く、重い犯罪だと思えるようになった。これからは子どもの虐待問題や温暖化などに関心をもって勉強していきたい」というものです。交流をきっかけに、子どもをめぐる社会のありようを批判的にとらえる重要性に気づいてくれたことは、とても嬉しいことです。

4. 2 児童の学びと気づき

次に、児童の学びや気づきについて見ていきます。

① 世界はいろいろ

- ② たくさんの気づきや発見
- ③ 交流に対する感想
- ④ 将来への期待や憧れ
- ⑤ (上小阪小学校のみ) 日本文化の発表に対する感想

の5つに分けられます。

順にみていきましょう。①の「世界はいろいろ」については本当に多くの感想がありました。「いろいろ知って本当に勉強になった」、「食べ物や文化は国によっていろいろ違うことがわかった」という全体的な感想から、「韓国にはキムチの種類が300以上あると知って驚き」、「ネパールでは、朝昼夜、全部のあいさつが『ナマステ』1つでいいと教えてもらった」、「マレーシアはとにかく暑いそうです」、「ブラジルの学校は、午前中か午後か、行く時間を自分で選べると聞いて驚いた」というように、交流した相手の国に関する感想まで、幅広く多くのことを知ったというおもしろさがあふれていました。きっと多くの違いに驚いたことでしょう。今まで知らなかったことを「知る」ことはとても面白いことです。「家に帰ったらお母さんに教えてあげよう」と書いている子どももいました。帰宅後どんなふう「新しく知ったこと」を家族に伝えたのでしょうか。世界はいろいろで、広いということを実感してくれたのでしょうか。

②「世界はいろいろ」であることを知った先に多くの「気づきや発見」がありました。「日本にこんなに外国の人がいたんだと思って、知らなかったことに気づきました」、「外国の人なのに日本語がうまいなあ」、「日本語があまり上手じゃなかったけど、ぼくたちに一生懸命伝えようとする気持ちが伝わりました」、「同じ国でも、人によって紹介する内容が全然違っておもしろかった」などと外国人が一枚岩ではないことを知った児童の感想がありました。外国人も多様なのです。それに気づくことができたのは、素晴らしいことだと思います。また「外国の人をわざわざ呼んでこなくても、私たちのクラスには〇〇さんと△△さんがいるじゃないか」という気づきからは、「もっと自分たちの周りにいる人、特に外国ルーツを持っている友だちから学べることもあるし、彼らの存在を大切にしよう」という温かい気持ちが伝わってきます。外国人だけでなく、クラスメートも多様なのです。

③ 交流に対する感想にも多くの児童が触れていました。驚いたのは、「緊張して不安だった」と答えた児童が多かったことです。外国人と交流したのは初めてだと書いている児童が多かったのですが、やはり交流前はどうかやってうまく交流するのか、心配していたことがわかりました。「心配だったけど、いざ交流が始まったら、そんな心配は吹っ飛びました」と書かれたコメントが示すように、あっという間に仲良くなっていたようです。「楽しかった」「嬉しかった」「おもしろかった」「本当によかった」というコメントが非常に多く、それが後述する「次の交流が楽しみ」につながっていました。「やっぱり仲良くなることが大切だなあと感じた」「こういう交流を続けていきたい」というコメントは非常に深く、意味のあるものです。参加した全員がそのように感じるのには難しいかも知れませんが、一人でもこの交流に意味を感じてくれる人がいれば、交流実践をやった価値があると思います。大学

生は「カッコいい」「プレゼンがうまい」と憧れを感じるコメントもありました。

④ 交流の大切さを感じたり、「カッコいい」大学生・留学生を見て、将来の姿を考えたりする貴重なコメントもありました。「写真やスライドをたくさん見せてくれて、説明がとても上手だった」大学生、「優しくとても親切だった」留学生たちは、児童にとってはいつか「自分もこうなりたい」というロールモデルとなったことでしょう。「大学に行ってみようと思った」、「外国は遠いと思ってたけど、海外旅行に行ったら、今日教えてもらったことを思い出して料理を食べます」、「留学生活はさびしいけどがんばってやっていると言っていました。私も留学してみたいと思いました」、「〇〇大学の〇〇学部に行きたいという夢があるので、その人たちに会えてよかった」という具体的なものもありました。「次の交流が待ち遠しい」、「次の交流は大学であつたらいいな」などという交流の継続を望む声も多かったです。いずれにせよ、将来の自分の夢や希望につながるいい出会いであつたと感じます。

⑤ 最後の「発表の感想」は日本文化を紹介した上小阪小学校の児童にのみコメントがありました。準備段階でのグループの活動の様子や当日の発表のできばえについて、厳しく評価しているものや満足度の高いコメントがありました。ほとんどの児童にとって、日本のことを外国人や大学生に紹介するのは初めてだったことでしょう。「うまく伝えられた」、「もうちょっとゆっくり説明したらよかった」など満足度の高低に関わらず、大学生からの質問や感想は嬉しかつたらうと思います。

最後に①～⑤からこぼれ落ちた意味のあるコメントをすくい上げてご紹介しましょう。「テレビでは、なにかあるとその国が悪いみたいにイメージができて、僕はそう信じてたけど、その国の人と実際あつたら、全然違つた。テレビをそのまま信じることはよくないと知つた」という報道の中立性に触れ、そのまま鵜呑みにすることの危険性を十分理解したコメントがありました。まさしくこれからの世界に求められるメディアリテラシーです。また、「新聞やテレビでは、よくないニュースも多いけど、周りの外国人と仲良くすることが大切なんだつてもっと伝えたい」という同じ地域社会にいる人々との関係性を重視し、仲良くなつてその人々を知ることが、世界の分断を解決する糸口となるという力強く頼もしい意見も見られました。私たち大人ができることは、このように深い思考のできる子どもたちを増やすこと、そしてこのような子どもたちの意見をさらにエンパワーするために何ができるかを考えることではないでしょうか。

5 考察のまとめと今後の課題

4でみたように、大学生・留学生と児童たちは、この交流実践を通して多くの学びがあつたことがわかります。これらを今後どのように発展させていけばよいのでしょうか。ここで、2で述べたこの活動の目的が達成できたかどうか確認してみます。

1. 東大阪市に関わる多様な人々の間で、多言語・多文化交流を活発に行う
2. 活動を通して、参加者が「多文化共生社会のメンバーである」という意識を涵養する

1の目的はほぼ達成できたと思います。2はどうでしょう。「メンバーである」という自覚までは至らなくても、この社会は「多様な人々で成り立っている＝多様な人々が共生している」ということを、仮に意識していなくても、体感できたのではないのでしょうか。今、子どもたちからのコメントを再度読んでみると、交流の面白さや難しさ、多文化を知ることへの好奇心や期待、そして外国人の存在や日本語への気づきなどがあります。それらを通じて未来の自分を想像し、生き方を模索しようとすることは、まさしく「多文化共生社会のメンバーである」ことといえるでしょう。この未来への想像をより確かに具現化していくために、大学と学校、地域社会は連携協働作業を通して、子どもたちを見守っていく必要があると思います。そのために考えるべきことを次に示しました。

1つ目は、子どもたちの多様な交流を継続、促進、充実化していくことです。東大阪には多くのリソース（資源）があります。大学や企業、教育機関、地域の教室、商店や病院など、より多様な場所から、人々が参画する必要があります。また外国人と言っても多様です。大学生だけでは外国人のごく一部に触れたに過ぎません。国際結婚の人々、技能実習生、スポーツ選手、労働者、レストランのオーナー、エンジニア、介護士など更に多様な人々とながらること、よりその多様性も深まるでしょう。自分たちの生活に外国人がいかに関与しているのかを知ることが肝要です。

2つ目は、交流活動そのものが双方向であり、共通の活動目的があることです。大学生・留学生はお客様ではありません。生活者です。おたがいに対等な関係でできることを探していきましょう。スポーツやゲーム、料理や劇作り、音楽でもいい、ともに同じ方向を向いて活動できるプログラムを模索したいと考えます。

3つ目は、子どもを取り巻く大人の多言語・多文化交流です。学校、教員、保護者など実は周りにいる人々の多文化受容度がそんなに高くないのではないのでしょうか。今回、大学生・留学生を連れて小学校に行きましたが、先生たちから話しかけられたという学生はごくわずかでした。もちろん、活動の主体は子どもたちですから、当然かもしれません。でも先生が積極的に大学生・留学生にあいさつをし、笑顔で話す姿を見ることは、交流そのものが実はごく日常であり、自然なことだということを子どもたちに示しているのではないかと思います。また、保護者の方や市民の方も、地域のスーパーやコンビニ、病院などで外国人の方を見たときに、人間として尊重し、かといって特別な存在ではなく、自然に対応する姿勢を子どもたちに見せることが必要です。残念ながら、留学生からは「コンビニで働いていますが、トラブルになると『日本人を出せ!』、『お前の日本語はわからんわ』などと言われて傷つきました」という話をよく聞きます。確かに留学生や外国人の日本語はわかりにくいときがあるかもしれません。しかし、そんなときだからこそ冷静に次のような想像してほしいと思います。今、あなたはアメリカに滞在し、スーパーでレジのアルバイトをしています。突然、レジに並んでいる現地の人にそのようなことを言われたら？英語が下手くそだからかわれたら？自分の国へ帰れと言われたら？アメリカ人の店長を呼んでこいと言われたら？

多言語・多文化交流を実践するにあたって最も大切なことは、かかわる全ての人々が対等に、同じ方向を見ていること、相手の立場を思いやることだと思います。これは、簡単なようではなかなかできないことです。世界では「World Englishes」（下線は複数を表しています。つまり多様な英語があるということです）と言って、英米の英語だけが英語ではないという考えが主流です。いろんな母語を持つ人が話す、なまりのある英語も言語として通用するという考え方です。これを日本に置き換えると「World Japaneses」でしょうか。日本人の日本語だけが正しいのではなく、相手に思いを伝えようと話す外国人の日本語も認めていきたいものです。また認めるのは言語だけではありません。言語の後ろには、考え方や立ち居振る舞い、伝統や習慣、食べ物などが存在しています。それらをひっくるめて大切にしよう、子どもたちはそんなことを学んだのではないかと思います。

6 おわりに

最後になりましたが、本報告書が「多文化・多言語社会」としての東大阪市において、子どもたちが何を学び、どのように社会で生きていくのか、そして私たち大人がそれぞれの場所で何ができるのかを再考する一助となれば幸いです。ただし、留意したいのは子どもたちの学びにみられた「将来への期待」にある「私も留学したい」、「大学に行きたくなった」などのコメントは、今すぐにその成果が見えるものではありません。将来、どのような形でこの交流の意義が確認できるのかを長いスパンで捉えていくことが重要です。つまり、目の前の子どもたちの様子やコメントのみを見て、この交流の成果を評価することや、達成率などという数字で判断しないことが求められているといえるでしょう。今後もこのような活動を通じて、子どもたちの夢の達成や成功を静かに後押しし、温かく見守っていけるような東大阪市でありたい、そんな希望をもって稿を終えたいと思います。

■参考文献

是川 夕（2021）『移民をどう考えるか』勁草書房。

中島智子（2008）「連続するオールドカマー／ニューカマー教育」志水宏吉編『高校を生きるニューカマー』明石書店。55-74。

■統計資料

東大阪市「人口の動き（令和4年度）」

<https://www.city.higashiosaka.lg.jp/0000030174.html>（2022年3月1日アクセス）

文部科学省（2021）「夜間中学の必要性和文部科学省における取り組みについて」

https://www.mext.go.jp/content/20210216-mxt_syoto02-000012914_2.pdf（2022年3月10日アクセス）

出入国在留管理庁（2021）「令和3年6月末現在における在留外国人数について」

https://www.moj.go.jp/isa/publications/press/13_00017.html（2022年3月10日アクセス）

研究活動代表者 近畿大学 グローバルエデュケーションセンター 准教授
高橋 朋子

研究活動分担者 大阪樟蔭女子大学 学芸学部 講師
大河内 瞳

近畿大学 国際学部 准教授
酒匂 康裕

大阪産業大学 国際学部 教授
中谷 潤子